

令和 6 年度

国立大学法人茨城大学学報



国立大学法人茨城大学

令和6年4月

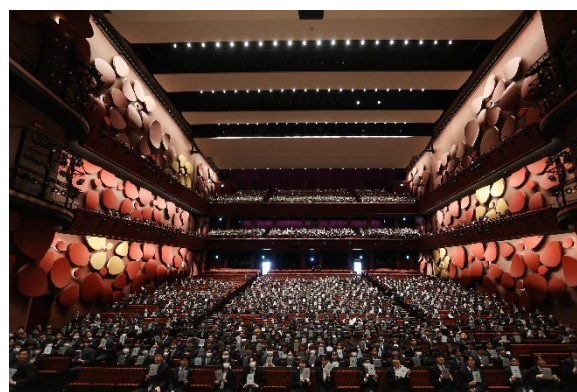
【4月1日付 学長・役員等】

学長	太田 寛行	
理事・副学長（総括・財務・企画・評価）	佐川 泰弘	
理事・副学長（総務・教育）	久留主 泰朗	
理事（学術）	金野 満	
理事（社会連携・基金運営）	下山田 和司	
理事（ダイバーシティ・国際・SDGs）	菊池 あしな	
監事	人見 次男	
監事	浅見 裕子	
副学長（教育改革）	西川 陽子	
副学長（研究・産学官連携）	倉本 繁	
副学長（情報統括・セキュリティ）	羽渕 裕真	
副学長（国際連携教育）	池田 庸子	
副学長（広報連携・大学院総括）	増澤 徹	
学長特別補佐（学内コミュニケーション）	青柳 直子	
学長特別補佐（博士人材育成）	武田 茂樹	
学長特別補佐（ダイバーシティ推進）	佐藤 裕紀子	
学長特別補佐（アジア・オセアニア連携）	葉 倩瑋	
学長特別補佐（社会連携・リカレント教育）	高橋 修	

4月5日 令和6年度入学式を挙行—水戸市民会館で初の開催

2024年4月5日（金）、茨城大学令和6年度入学式が、水戸市民会館グロービスホール（大ホール）にて開催された。同館で入学式を実施するのは初めて。午前の第一部と午後の第二部を合わせて、2,277人の入学を太田寛行学長が許可した。

また入学式の終了後は同じステージ上にて「フレッシュマンサクセス（F S）セレモニー」を開催した。本学では4月より「スチューデントサクセス」というコンセプトを掲げ、学生の「なりたい自分になる」を中心に据えた教育・学生支援の体制を整備。本セレモニーでは、太田学長が大学での学修の目標やスチューデントサクセスの考え方を紹介するとともに、在学生たちが自らの考える「サクセス」やこれまでの活動について新入生に語りかけた。



【学長式辞】

茨城大学の学部・学環・大学院及び特別専攻科に入学された 2,277 名の学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。茨城大学の教職員と在学生一同、皆さんを心から歓迎致します。そして、これまで皆さんを支えてこられた、ご家族の皆様方にも心からお祝い申し上げます。

茨城大学は、今年、新制大学として創立 75 周年、最も古いルーツ校である拡充師範学校の創設から 150 年になります。今から 75 年前の開学に至る出来事を調べてみると、地域の人たちの力強い応援がありました。例えば、当時の茨城新聞社・社長は、「わが県民も国立茨城大学は文部省が作ってくれるのだなどの甘夢(かんむ)を貧ってはならない。わが県の最高学府創建はわが県民個々の公的責任感の発露によってのみ実現させることを特に銘記すべきである。」と語ったのです。

そのような地域の人たちの思いに応えるように、鈴木京平・初代学長は、開校式の時、最初の新入生に向かって、「野心満々たれ」という言葉で、訓示を結びました。この言葉は、学修だけでなく、失敗を恐れずに、いろいろなことに挑戦して欲しいというエールです。そして、75 年経った今でも通じる言葉であり、「失敗を恐れずに挑戦すること」を皆さんは受け継いで下さい。

もう一つ、皆さんに“Student Success”ということ伝えたいと思います。この“Student Success”とは、単に良い成績を取ることや卒業まで着実に学修を進めるだけでなく、自分が努力した成果を評価し、自分の目標や価値観に基づいて充実感を感じるのだと思います。すなわち、どれだけ「なりたい自分になったか」です。

そこで、皆さんの「なりたい自分」とは何ですか？ もちろん、そのような目標を持っているからこそ本学に進学したのだと思います。では、「なりたい自分」をどのように、みつけましたか？

私は、それを見つけるプロセスが、「選択」、「選ぶこと」の繰り返しだと思っています。選択と言っても、いろいろなレベルがありますね。日々の暮らしの中で、今日は何を着ていこうか、お昼は何を食べようか、というような、何気ない、日常的な選択もあれば、どの大学に進学するか、どの会社に就職するかなどは大きな選択です。この“選ぶ”という行為には、よく考えてみると、必ず“否定”が含まれています。選ばなかったものを“否定したもの”とするのは言い過ぎかもしれませんが、特に大きな選択の時、選ばなかったものは、そうではないと否定したものであり、それによって「なりたい自分」を確認したはずで。

私たちの「選択」は、他者との関わりで育まれると思います。このことに関して、水戸芸術館の館長を務められた音楽評論家、吉田秀和さんの言葉を紹介します。約 40 年前の著作、「調和の幻想」のなかで、中国を訪問した際の印象を記した部分です。

「異なった文明の間での影響関係というものは、何も一方が他方と同じものになってしまうというように進むと

は限らない。いや、一方が、他方の与えるものから、あるものは受けとり、あるものは棄てるという具合に取捨選択しながら同化してゆくのが普通にみられる過程だろう。その意味で、影響とは選択にほかならない。場合によったら、自分は懸命に真似したつもりなのに、まるでちがうものをつくってしまうかもしれない。しかし、それも影響である。」

吉田秀和さんが文明について語ったことですが、私は、「なりたい自分」も、そのように、他者の交流によって、つくられていくのではないかと考えています。懸命に、憧れの誰かを真似したつもりなのに、それとはちがう生き方になるのも、「なりたい自分」になることだと思います。

選択の深い意味を考えるのは、ヒトの命をめぐるときでしょう。人類学者、磯野真穂さんは、哲学者、宮野真生子さんの対談から、次のような言葉を紡いでいます。

「私たちが選択において選ぶことができるのは、選択において変わってしまうだろう自分を発見し、その変容した自分がその後起こる出来事に対応してゆくことを許容することである。あなたは「選ぶことで自分を見出す」。「選び、決めたこと」の先であなたという存在が生まれてくるのだと」

これは、2019年に42歳で亡くなる宮野さんとの交流を通して、死期が迫る宮野さんとのギリギリの対話を通して、磯野さんと宮野さんが、“迫られる選択に対して、選んだ結果、変容する自己”を肯定して生きていく確信を互いにみつけ合った瞬間の言葉だと思います。

茨城大学は、2030年にあるべき大学の姿として、イバダイ・ビジョン2030を掲げ、12のアクションを策定しています。その最初のアクションは、「社会・世界に開かれたキャンパスを構築し、多様な価値観の交差により新たな価値観が生み出される学びの場を提供する」であり、2番目のアクションは「社会の変化・ニーズに柔軟に対応しながら、学修者の個性と可能性を伸ばし、挑戦を支え、成長を実感できる教育を提供し続けられるシステムを構築し、進展するデジタル技術を活用して教育方法を改善する」です。大学もさまざまな選択を続ける過程で、学生のみなさんを含む、多くの人たちの影響を受けながら、「こうありたい」という姿へと進んでいくのです。

私たち教職員一同は、これらのアクションを推進し、「なりたい自分」に向かって邁進する皆さんを支えていきます。

以上をもって入学式の式辞といたします。

本日は、入学、誠におめでとうございます。

令和6年4月5日
茨城大学長 太田寛行

4月4日 デジタルサーブ株とネーミングライツ協定を締結 「Digital Serve STUDIO」 オープニングセレモニーを開催

茨城大学と業務系システム開発などを手がけるデジタルサーブ株式会社（本社：茨城県水戸市）は、「ネーミングライツ事業に関する協定書」を締結した。これにより 2024 年 4 月 1 日より、水戸キャンパス図書館 1 階の「ラーニングコモンズ」の愛称が「Digital Serve STUDIO（デジタルサーブスタジオ）」となった（2027 年 3 月 31 日まで）。水戸キャンパスの施設に適用するネーミングライツ協定は初めて。記念のオープニングセレモニーを 4 月 4 日に開催した。



4月10日 地域未来共創学環開設 青空の下の記念式典で門出を祝福 —「次なる 75 年、150 年に向けてのチャレンジ」

学部相当の新たな教育組織「地域未来共創学環」を開設し、44 名の「第一期生」を迎えた。これを記念し、4 月 10 日、水戸キャンパスの共通教育棟 1 号館に整備された真新しい中庭（ライトコート）において、同学環の開設記念式典が開催された。

地域未来共創学環は、人文社会科学部・工学部・農学部との関係による学部等関係課程として開設された。分野・文理横断型のカリキュラムと「コーオプ教育」を特徴としている。

開設記念式典には、茨城県教育委員会の森作教育長、茨城県経営者協会の笹島会長を来賓に迎え、教職員や学生たちの他、コーオプ教育に協力いただく企業・自治体からも多くの参加があった。



茨城県教育委員会の森作教育長

4月13日 75年目の春にも「茨大新歓祭」—大学でなりたい自分へ

4月13日、「2024年度茨大新歓祭」が水戸キャンパスで開催された。春らしい暖かさが人出を誘い、オープニングセレモニーは満席。新歓祭の始まりと同時に多くの新入生が詰めかけた。今年度の新歓祭では、昨年度に引き続きステージ企画や各団体によるPR企画、オンラインでも参加可能なラジオ企画が行われた。



4月22日 インドネシアのガジャ・マダ大学からエミリア学長らが来学—教育・研究の交流強化へ 新しいレベルでの連携を

4月22日、インドネシアのガジャ・マダ大学（Gadjah Mada University）のオーヴァ・エミリア（Prof. Ova Emilia）学長ら計12名の一行が水戸キャンパスを訪れ、今後の連携の強化に向けて、太田寛行学長らとのミーティングを開催した。

ガジャ・マダ大学は、60,000人以上の学生数を誇る大規模な大学で、18の学部をもち、世界中の大学と交流を進めている。



令和6年5月

5月13日 住民の「ナラティブ」から考える台風災害とまちづくり ―一人社・伊藤哲司ゼミ 水戸市飯富地区での活動の成果を展示

人文社会科学部・社会行動論ゼミ（担当：伊藤哲司教授）では、2019年の台風災害で大きな被害を受けた水戸市飯富地区で、住民へのインタビューやワークショップなどの活動を継続的にを行い、まちづくりにも関わってきた。その活動を紹介する企画展「川の記憶とまちづくりのナラティブ」が水戸キャンパス図書館1階展示室で開催された。会場には、地元団体の「いいとみっと」が作成した郷土かるたやボランティアサークル＊Fleur＊（フルール）が手がけた企画も展示された。



5月13日 茨城大学と笠間市が包括連携協定を締結 ―相互の資源活用により、人材の育成と地域の活性化を目指す

茨城大学と笠間市は、2024年5月13日、包括連携協定を締結した。

本協定は、茨城大学と笠間市が対等な立場のもとで、相互の包括的な連携と協力により、人口減少、少子高齢化などを背景とした地域課題に対応し、人材の育成と地域の発展に寄与することを目的としたもの。この目的を達成するため、「国際的に活躍できる人材の育成及び地域定着に関すること」「地域の未来を担う人材の育成及び地域定着に関すること」「相互の資源活用による社会課題の解決及び地域の活性化に関すること」の3項目を定め、連携・協力を進めていく。



太田学長と笠間市の山口市長（右）



5月15日 野口不二子氏らが来学—野口雨情の精神を次の世代へ

5月15日、日本を代表する詩人で、童謡「しゃぼん玉」「赤いくつ」や「七つの子」などで知られる日本を代表する詩人・野口雨情の孫で、北茨城市の「野口雨情生家・資料館」館長の野口不二子氏が茨城大学水戸キャンパスを訪れた。



右から太田学長、野口不二子氏、野口雨情生家・資料館の森田事務局長

令和6年6月

6月6日 茨城大学東京サテライトオフィス、「CIC Tokyo」内にオープン ―大学発スタートアップ創出を加速化

2024年6月6日、東京都港区の虎ノ門ヒルズビジネスタワー内にある国内最大級のイノベーションセンター「CIC Tokyo」に、東京サテライトオフィスをオープンした。茨城大学の教職員や学生と経営者・投資家とのコミュニケーションを促進し、大学発スタートアップの創出・支援の取り組みを加速化させる。



6月7日 茨城大学水戸キャンパスにて交通安全キャンペーン実施

水戸キャンパスでは、6月7日より7月上旬まで、茨大前交番と連携した交通安全キャンペーンを実施した。

学生に自転車利用の際の交通ルールとマナーについて考えてもらい、交通安全意識の向上を図ると共に、事故の防止につなげたいと企画。ポスターの掲示による啓発運動や職員の立哨が行われた。



6月18日 (株) DEVELOPTONIA に茨城大学発ベンチャー称号付与 工・新納浩幸教授が最高 AI 責任者

6月18日、茨城大学日立キャンパス小平記念ホールにて、株式会社 DEVELOPTONIA [デベロップトニア] (代表：大場一雅 CEO、茨城県日立市) に対する、茨城大学発ベンチャーの称号授与式が行われた。本学の教員や学生・卒業生が創業者とならない企業への称号付与は初めてで、コミュニティの共創を展望した、全国の大学の中でも珍しい新たなタイプの「茨城大学発ベンチャー」の誕生となった。授与式には、大場 CEO、同大の教職員以外にも、同大卒業生やインターンシップの学生、茨城県県北振興局の幡谷佐智子局長などが出席した。



・参考リンク：[株式会社 DEVELOPTONIA](#)

6月19日 ヴァイオリニスト・五嶋みどりさんらが附属特別支援学校で演奏会 「本物」の音楽が子どもたちの学びと生活の世界をひらく

6月19日、茨城大学教育学部附属特別支援学校で、世界的なヴァイオリニスト・五嶋みどりさんらによる弦楽カルテットの演奏会が行われた。認定 NPO 法人ミュージック・シェアリングの春の訪問プログラムとして実現したもの。

ミュージック・シェアリングは五嶋みどりさんが主宰する活動で、ホームページでは「人々にとって、本物の音楽、音楽家がもっと身近になるようにし、豊かな人間性をめざす環境作りの手助けを行います」といった理念が紹介されている。1993 年より福祉施設や教育機関などを訪れる訪問プログラムをスタートし、これまで 1000 を超える施設を訪問している。

参加した子供たちは、日々学んでいる空間で“本物”の音楽をからだ全体で味わうことができた。



6月26日 令和6年度茨城大学名誉教授称号授与式を実施

6月26日、令和5年度茨城大学名誉教授称号授与式を水戸キャンパス図書館ライブラリーホールで開催した。令和6年4月に名誉教授の称号を授与されたのは12名で、うち6名が授与式に出席。太田寛行学長から、名誉教授称号記が手渡された。



令和6年度名誉教授称号 被授与者

氏名	元所属等
正保 春彦	人文社会科学部
村上 信夫	人文社会科学部
数井 みゆき	教育学部
勝本 真	教育学部
村上 朝子	教育学部
高妻 孝光	理学部
藤原 高德	理学部
伊藤 伸英	工学部
木村 成伸	工学部
近藤 良	工学部
周 立波	工学部
小川 恭喜	農学部

6月26日 令和6年度学長と学生の懇談会を実施

茨城大学は6月26日、水戸キャンパスで「学長と学生の懇談会」を開いた。学長や教職員と学生が直接対話し、大学運営に生かすことを目的に毎年行っている。例年大教室で実施しているが、今回

は水戸キャンパス図書館本館内のサザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店でコーヒーとケーキを囲んで開催。少人数でより深い対話が繰り広げられた。



6月28日 アントレプレナーシップ教育プログラム、初の修了生2人が体験報告—ネクストフェーズセッション

茨城大学アントレプレナーシップ教育プログラムのスタートから3年半が経ち、初の修了生を輩出した。6月28日、社会連携センター&オンラインで行われたシンポジウム「ネクストフェーズセッション」では、プログラムの初の修了者となった農学部の北島あゆみさんと人文社会科学部の倉茂友杜さんの4年生2人が自身の体験を語るとともに、ゲストを交えたトークセッションに臨んだ。

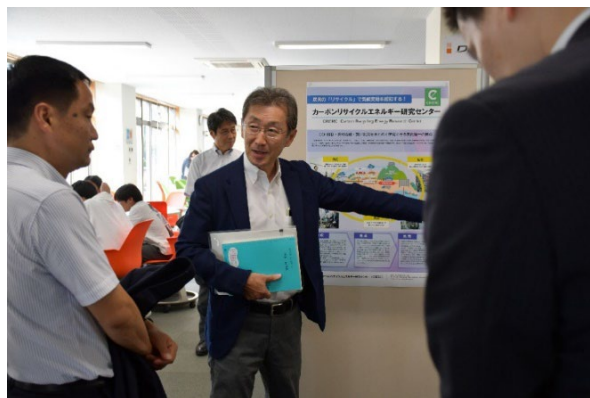
トークセッションは、プログラムを担当する間中健介講師の進行のもと、北島さん、倉茂さん、国家公務員として科学技術行政や教育行政に長年従事してきた中川健朗さんが意見を交わした。



令和6年7月

7月4日 高等教育の現状について文部科学省と意見交換

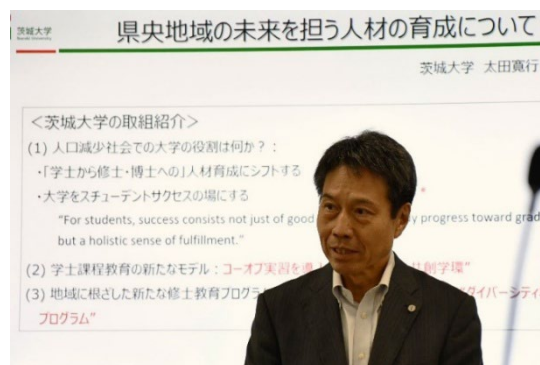
文部科学省の高見英樹・高等教育政策室長ら5名が7月4日、茨城大学水戸キャンパスを訪れ、学長らと高等教育の現状について意見を交わした。茨城大学の研究成果や取り組みを紹介したパネル展示などを見学。今年4月に開設された地域未来共創学環の学生たちとも交流した。



7月10日 太田学長が茨城県央地域の9市町村の首長と意見交換 ―未来を担う人材の育成に関する懇談会

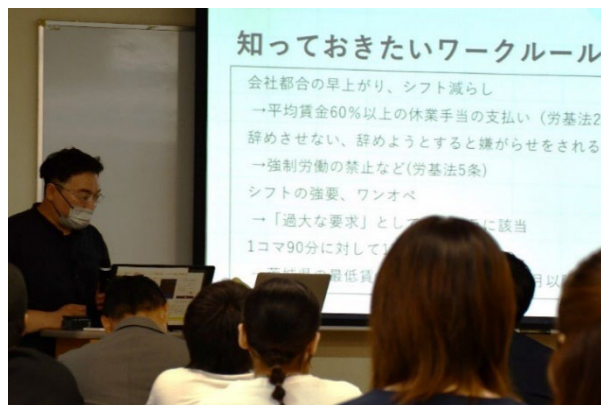
7月10日、太田寛行学長が、水戸市役所で行われた「県央地域の未来を担う人材の育成に関する懇談会」に出席し、地域で活躍する人材を育てるために何が必要か、9つの市町村の首長と意見交換をした。

懇談会のメンバーは水戸市、笠間市、ひたちなか市、那珂市、小美玉市、茨城町、大洗町、城里町、東海村—の9市町村の首長と、太田学長。太田学長は「人口増加の時代は学士の活躍が経済成長につながっていたが、人口減少の時代で活力を維持するためには、もう一段階レベルを上げて修士・博士が活躍していく必要がある」と話した。



7月16日 ブラックバイト問題について考えるワークショップー労働ルールを学び、身を守ろう

7月16日、このブラックバイトの問題について考えるワークショップが、人文社会科学部の松井良和講師が担当する労働法Ⅱの授業内で開かれた。労働法ゼミ所属の学生の発案で実現。ワークショップでは、学生らが被害に遭った経験を報告し、被害に遭わないため身につけておきたい労働ルールを学んだほか、日本労働組合総連合会（連合）と協力し、被害に遭ってしまった際の相談方法なども伝えた。



7月19日 原子科学研究教育センター、東海村でキックオフシンポジウムを開催

4月に開設した茨城大学原子科学研究教育センター（RECAS）のキックオフシンポジウムが、7月19日、東海村産業・情報プラザ（アイヴィル）多目的ホールで開催された。文部科学省の清浦隆大臣官房審議官、茨城県の岩下泰善副知事、東海村の山田修村長、連携する研究機関である日本原子力研究開発機構（JAEA）や高エネルギー加速器研究機構（KEK）から来賓を迎え、安全・安心な革新原子科学の教育・研究基盤の確立を目指す同センターの使命を約100人の参加者とともに確認した。



令和6年8月

8月7日 茨城県内企業で働く女性技術者と交流！ 女子中高生向けバスツアーを開催

茨城県内の女子中学生・高校生たちが、県内企業で活躍している女性技術者のもとを訪れて見学・交流するバスツアーが7～8月に4回実施開催された。工学部が取り組む「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」の一環。

同プログラムでは、県内で学ぶ女子中高生の理工系分野への興味・関心を高め、地元企業で技術者として働くことの誇りや喜びを伝えるため、さまざまな取り組みを行っている。「夏休み企業見学バスツアー」は、中高生のロールモデルとなる女性技術者の職場を見学し、交流する機会を提供する企画で、2023年度にスタートした。

8月7日のツアーには、16人の女子中高生が参加。朝8時30分に日立駅に集合し、非鉄金属大手・JX金属の磯原工場と日立事業所を訪れた。

計4回のツアーでは、JX金属のほか、神戸工業試験場、鈴縫工業、三友製作所、野上技研、日立建機、SMCの皆さまにご協力いただき、交流、見学を行った。



令和 6 年 9 月

9 月 18 日 ウダヤナ大学・デワ教授に初の名誉博士称号！

9 月 18 日、茨城大学名誉博士の称号をインドネシア・ウダヤナ大学のデワ・ングラ・スプラプタ教授に授与した。

「茨城大学名誉博士称号」は、学術文化や国際交流の発展において貢献し、茨城大学の教育研究上顕著な功績があった方に授与するもので、今後、そのような方々とさらなる交流を展開すべく、2024 年 5 月に制定された。この称号は、学校教育法によって規定される博士の学位や名誉教授とは異なり、学内の規定によって授与する。

デワ教授はウダヤナ大学の大学院院長や評議会議長を歴任。日本とインドネシアの友好親善と学術交流の推進に貢献したことにより 2015 年度外務大臣表彰を受賞した。2024 年春の叙勲においては、植物病理学分野における日本・インドネシア間の学術交流及び相互理解の促進に寄与したことにより、旭日中綬章を授与された。茨城大学とは、教育や研究において、約 20 年にわたり連携を続けており、2016 年度からは茨城大学農学部アドバイザーボードも務めている。

同日はデワ教授、ウダヤナ大学のシガカン・プトゥ・グデ・スアルダナ学長、イ・ゲデ・マハルディカ評議会議長が水戸キャンパスに来学し、名誉博士称号授与式や記念パーティーなどに出席した。





令和6年10月

10月1日 核融合発電の技術シーズを、社会実装へどう生かすーサイエンスアイデアソン in QST

10月1日、水戸市民会館でサイエンスアイデアソンを開催した。「大学が果たすべきアントレプレナーシップ教育」や「スタートアップと創る環境エネルギーの未来」をテーマとした基調講演を通してエネルギーや環境分野における大学発スタートアップの必要性を確認するとともに、シーズを持つ研究者とスタートアップ支援者、投資家をつなぐワークショップを行い、スタートアップ創出の機運醸成を図った。

今回のサイエンスアイデアソンは、エネルギー関連の研究を進める研究所や大学が集積する水戸市周辺地域や筑波研究学園都市から GTIE に参画している研究者らのシーズを活用しようと企画された。現地参加とオンライン参加を合わせて、県内外の多くの研究者や支援者、投資家らが集まった。



ワークショップの様子



司会を務めた茨城大学研究・産学官連携機構 (iRIC) の酒井宗寿准教授

10月11日 子宮頸がん予防セミナー ～ハタチからの子宮頸がん検診～

10月11日、土浦協同病院の市川麻以子先生をお招きし、茨城大学教育学部養護教諭養成課程2年生と保健体育選修を対象に、子宮頸がん予防セミナーが開催された。

この取り組みは茨城県内の複数の大学で行われているもので、本学では昨年に引き続き2回目となる。今回は「ハタチからの子宮頸がん検診」をテーマに、病気の概要やがん検診・予防など、子宮頸がんについて基本的な部分から市川先生が講義した。



10月12日 日越大学と覚書締結、学部生の交流が可能に

茨城大学は10月12日、ベトナムの日越大学（VJU：Vietnam Japan University）と学生交流に関するMOA（覚書）を締結した。これにより、学部生の交流が可能となる。これまでは、茨城大学が日越大学修士課程の気候変動・開発プログラム（MCCD）の幹事校を務めていることから、大学院生の交流が主体だった。



茨城大学の太田学長（左）と日越大学の古田学長

10月16日 “学福連携”で学内カフェ運営 福祉事業所と教育学部の学生が協力

茨城大学教育学部で、福祉作業所と連携して学内カフェを実施する取り組みが始まった。カフェ業務などを行う茨城県常陸太田市の就労継続支援B型事業所「山のcafe sasahara」が同所のサンドイッチなどを出張販売し、学生が接客やイートインスペースの準備などを行う。今年度は初回が10月16日で、12月にかけて計3回実施。新井英靖教授は、「今後さらに発展させ、いずれは教員免許取得のために必要な介護等体験として整備していきたい」と語った。



10月23日 大学院人文社会科学研究科「ダイバーシティ地域共創教育プログラム」キックオフシンポジウム開催

2025年度に開設する大学院人文社会科学研究科「ダイバーシティ地域共創教育プログラム」のキックオフシンポジウムが、10月23日、水戸キャンパスで開催された。学内外から対面で83人、オンラインで92人が参加した。

「ダイバーシティ地域共創教育プログラム」は、ダイバーシティ経営や持続可能な地域経済の発展に貢献する人材の育成を目指し、茨城大学、宇都宮大学、常磐大学の3大学が連携して運営する。

シンポジウムの冒頭、文部科学省高等教育局高等教育企画課長の吉田光成氏は、社会課題が複雑化する中で人文・社会科学の知の価値創造的な役割に期待が高まっていると述べ、今回の三大学の提案は地域のダイバーシティ向上への期待と実現性が高いと評価した。



文部科学省の吉田氏



3大学の関係者による集合写真

10月28日 農学部とコマツ、実証研究の収穫米 17 トンを子ども食堂などに寄贈

茨城大学農学部と建設機械メーカーのコマツは、農業用ブルドーザーを活用した乾田直播水稻栽培の有効性に関する実証研究を行っており、その研究を通じて収穫された新米を、食の支援を必要とする方々に毎年寄贈している。今年も 17 トンのお米を子ども食堂などに寄附した。

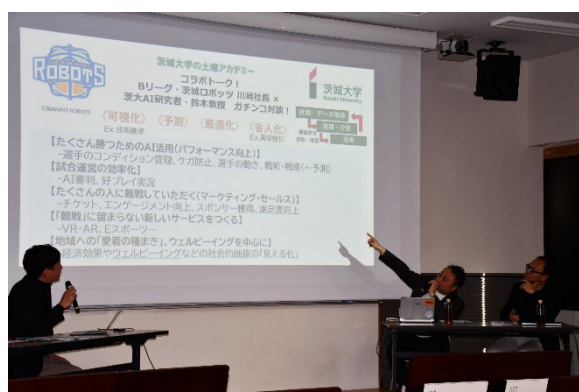
10月28日、阿見キャンパスにおいて贈呈式を実施。阿見町を中心にひとり親家庭の支援や子ども食堂の運営や学生への食糧支援を行っている ami seed、社会福祉法人阿見町社会福祉協議会、子ども食堂サポートセンターいばらきのみなさんが出席した。



令和6年11月

11月16日 バasketボールクラブ「茨城ロボッツ」とAI活用についてのトークイベント開催

茨城大学は、2024年11月16日、市民向けの無料講座イベント「土曜アカデミー」の特別企画として、BasketボールBリーグの茨城ロボッツを運営する株式会社茨城ロボッツ・スポーツエンタテインメントとの連携によるトークイベントを開催した。同社の川崎篤之社長と、茨城大学工学部及び地域未来共創学環で教鞭をとる鈴木智也教授が対談した。



11月21日 地域の教員不足解消へ、高大連携！—教員志望の高校生が教育学部の授業に参加

茨城大学教育学部で11月21日、茨城県立鉾田第一高等学校の教員養成講座の1、2年生35人が学部の授業に参加する高大連携事業が行われた。同日の2、3限目に同学部で開講されている授業科目の中から、高校生が興味のある科目を選んで授業に参加。教員志望の生徒を高校として支援している同高との連携により、県内における教員不足の解決への貢献を目指す取り組み。

茨城大学は令和7年度入学者選抜より、教育学部において総合型選抜を初めて導入し、新たに「地域教員希望枠」を設ける。茨城大学教育学部は、地域において教員養成の取り組みを強化している高等学校との連携を今後も推進していく考え。





11月25日 令和6年度前学期成績優秀学生表彰式を開催

茨城大学は11月25日、令和6年度前学期成績優秀学生表彰式を行った。本学では、学業成績が特に優れ、かつ人物が優秀であると認められる学生を表彰するとともに、授業料の一部を免除する「成績優秀学生表彰」を実施している。今回は学部4年次と大学院1年次（修士課程／博士前期課程／専門職学位課程）の学生計65人が表彰された。



水戸キャンパス



日立キャンパス



阿見キャンパス

11月28日 「気候の危機にどう向き合うか」第一人者の東大・江守教授が講演 ー茨城県地域気候変動適応センターシンポジウム開催

茨城県地域気候変動適応センターと茨城大学は11月28日、水戸キャンパス図書館3階ライブラリーホールとオンラインで、2024年度シンポジウムを開催した。温暖化研究の第一人者である、東京大学未来ビジョン研究センターの江守正多教授を招き、「気候の危機にどう向き合うか」をテーマに講演していただいた。気候変動の研究や対策に関する報告や、パネルディスカッションも行われた。

会場からも気候変動のメカニズム、政府や個人の緩和策、適応策などに関する質問や意見があり、活発な議論がなされた。



令和6年12月

12月10日 “世界最古のオーケストラ”荘厳な調べを堪能、演奏体験も ―雅楽体験ワークショップ

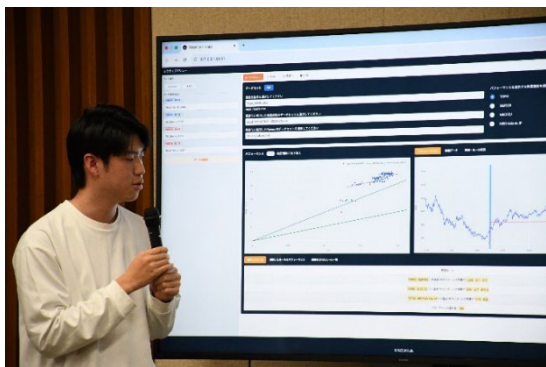
日本古来の伝統芸能・雅楽を通じて、外国人留学生をはじめ多くの学生・教職員に日本文化の魅力を知ってもらおうと、水戸キャンパス講堂で12月10日、雅楽体験ワークショップが開催された。特定非営利活動法人日本音楽国際交流会の協力。プロの雅楽奏者11人が生演奏を披露したほか、雅楽の歴史や楽器の演奏の仕方などを解説した。

日本体験学習の授業を履修する外国人留学生のために企画されたものだったが対象を拡大し、当日は135人の学生・教職員が訪れた。



12月17日 常陽銀行 市場金融部×茨城大学 鈴木智也研究室の共同研究で成果 ―AIを活用した資産運用業務支援のシステムを実装 「期待を上回るパフォーマンス」

茨城大学大学院理工学研究科の鈴木智也研究室と常陽銀行市場金融部は、2021年12月より、共同研究を進めてきた。研究課題は、AI及び機械学習を活用した有価証券運用力の高度化。両者は毎月のようにディスカッションを重ね、株式の運用戦略をAIが提案する業務支援システムの開発につながった。12月17日にはその成果報告を兼ねた報道関係者向けの発表会が実施された。





12月18日 令和6年度「学長と学生の懇談会」－入学後に自分の『サクセス』は見たか？

学生が太田寛行学長や教職員と直接話し合い、より良い大学運営を目指す取り組み「学長と学生の懇談会」が2024年12月18日、水戸キャンパスで開かれた。6学部・学環の1年生13人が出席し、大学生活でかなえたい「サクセス」や悩み、改善してほしい点などを語った。

茨城大学では、学生の学びや生活における充実感や達成感を示す「スチューデントサクセス」を重視し、「なりたい自分になる」ことを中心に据えた学修者本位の教育・学生支援に取り組んでいる。今回のテーマは「入学後に自分の『サクセス』は見たか？～自己実現に必要な課題と展望～」。9か月の大学生活を経て、1年生が自分の「サクセス」をどう考えているのか、率直な意見交換がなされた。

宮崎尚子スチューデントサクセスセンター（SSC）スチューデントライフサポート室長がファシリテーターを務め、出席した学生一人一人に意見を聞いた。



12月19日 学友会の昭和30～40年代の活動を記録した冊子を卒業生有志が制作 —「学生の自治」を求めた情熱を後輩たちに伝えたい

学生の課外活動などを学生の立場からサポートしている1951（昭和26）年設立の「学友会」。昭和30～40年代に学友会の幹部を経験した茨城大学卒業生有志により、活動記録誌が制作された。

今回制作された活動記録誌は、A4判カラーで96ページ。1957（昭和32）年から1970（昭和45）年にかけて、それぞれの年に学友会の役員を務めた方々が当時の活動についての手記を提供。貴重な写真や資料の画像も掲載されており、往時の茨大生たちの学生生活の姿が分かる、貴重なドキュメントになっている。



記録誌を届けてくださった

黒田哲弥さん（左）と小野瀬武康さん

12月24日 「総合気候変動科学」の創出に向けたシンポジウム 関連4センター登壇

12月24日、本学の「総合気候変動科学の創出」という目標を支える4つのセンターの代表が一堂に会し、「茨城大学が拓くグリーンテクノロジーの未来」をテーマとするシンポジウムを開催した。

シンポジウムの冒頭、太田寛行学長、金野満理事・副学長（学術）が登壇し、1949年の創立以来、環境科学の教育・研究に取り組んできたこと、また、地球・地域環境共創機構（GLEC）、カーボンリサイクルエネルギー研究センター（CRERC）、原子科学研究教育センター（RECAS）に続き、グリーンバイオテクノロジー研究センター（Gtech）を新設する予定であることを語った。

後半のパネルディスカッションでは、4センターのリーダーがエネルギー政策、国際連携、融合的アプローチについて議論した。





左から Gtech センター長予定者の小松崎教授、RECAS 岩佐センター長、CRERC 田中センター長、GLEC 戸嶋機構長

12 月 25 日 鹿島石油と連携協力に関する協定を締結

茨城大学は、石油精製などを行う鹿島石油（神栖市）と、連携協力に関する協定を締結した。12 月 25 日に締結式が行われた。今後、茨城大学カーボンリサイクルエネルギー研究センター（CRERC）との共同研究や地域未来共創学環のコーオプ実習先候補となることが期待される。



令和 7 年 1 月

1 月 6 日 学長年頭あいさつ

太田寛行学長から全教職員へ向け、年頭のあいさつをオンラインで配信した。

2025 年のスタートにあたって

茨城大学 学長 太田寛行

みなさん、あけましておめでとうございます。

昨年は、能登半島地震で始まる厳しい年でした。その後も、豪雨災害があり、今でも、被災された方々は苦境にあえいでいます。一刻も早く、平穏な生活にもどれるよう、祈るばかりです。また、日本全体で台風被害が相次いで起こり、気候危機を今まで以上に実感した年だったと思います。その災害多き年は、本学の新制大学として設立 75 周年の年でもありました。今年は、その 75 年という区切りの年から、次なる 75 年に向けてスタートを切る年だと思っています。

さて、そのスタートにあたって、今年の抱負を 3 つ述べたいと思います。

一つ目は、総合気候変動科学の推進です。昨年末に、一連のシンポジウムを開催しました。まず、11 月末に、本学と茨城県地域気候変動適応センターとの共催で、「気候の危機にどう向き合うか」をテーマにした講演会とパネルディスカッションを開催し、その翌日には、本学の CRERC が、東京都内の会場で、最新のエネルギー動向や二酸化炭素の回収・貯蔵の技術について議論をするシンポジウムを開催しました。さらに、12 月中旬から下旬にかけて、GLEC の 5 周年記念シンポジウムに続けて、本学の「総合気候変動科学」を支える 4 センターの代表が初めて集結して、iRIC のシンポジウムを開催しました。これら一連のシンポジウムは、本学が「総合気候変動科学」という学問分野をつくり、世界をリードしていくことを、学内外にアピールするものでした。今年は、この新分野の研究と教育を展開すると共に、卒論生や修士学生向けの教科書をつくること提案しました。これは、全学的に、関係する教員間で、連携を密にして、研究と教育を進めようという意図です。

二つ目は、DP ルーブリックです。本学は、4 階層からなる「教育の質保証システム」を構築してきました。このシステムの運用と展開は、中教審が提示した教学マネジメント指針にある「学修者本位の教育の実現」の考え方のコアな部分を具現するものでした。その指針をさらに進める、先端的な取組が、DP ルーブリックであり、これによって、本学が「学修者本位」に立つ教育を先導する大学になると考えています。さらに言えば、これは、国立大学法人・第 4 期中期目標期間で多くの大学が提示しようとしている“ソーシャルインパクト”になるものとして、本学独自の成果だと考えています。

関連して、昨年末に開催した「学長と学生の懇談会」では、学生たちに、大学生活でかなえたい「サクセス」や悩み、改善してほしい点などを語ってもらい、学務関係者にとっては貴重な機会でした。その懇談会では、私の方から、学生たちが、懇談会のような企画を提案したり、運営する組織、仮称ですが、「SS(スチューデントサクセス)委員会」を作ることを提案しました。これも「学修者本位」の大学になる一環だと考えています。

三つ目は、アウトリーチ活動です。まず、卒業生や本学を応援してくださる方々や企業のみなさんとの交流の場をつくることです。現在、その交流の場の名称の提案を皆さんにお願いしており、今年のホームカミング

デーは、その第 1 回の集まりにしたいと思っています。それから、昨年から、広報室から広報・アウトリーチ支援室へとバージョンアップさせて、アウトリーチ活動を強化してきました。アウトリーチを考えると、いろいろな取組が思い浮かびます。昨年は、入学式を水戸市民会館で実施したことも、フレッシュな新入生を市民に知ってもらう意義があったと思います。今年の卒業式も市民会館で実施する予定であり、今回は、卒業式から入学式までの期間に、水戸市民会館では、茨大の教育と研究の取組を紹介する“茨大ウィーク”なる企画を実施する予定です。それから、入学式の日イベントでは、高橋・水戸市長にご登壇いただき、本学教職員や在校生だけでなく、市民が新入生を歓迎し、新入生が街をさらに活気づける切っ掛けとなればと考えています。

さて、人は何故、都会に憧れ、そこに向かうのか？ という問いに対して、人が集まれば、いろいろな情報が手に入り、自分を変える何かイノベーションが生まれるというのが答えの一つでしょう。しかし、大学も人が集まり、様々な先端の研究成果や世界の歴史や文化に触れることができる場であるはずですが、茨城大学にも多くの人々が集まり、いろいろなイノベーションが生まれるような場にしていきたくと思っています。そのためには、中高生から社会人、さらに、海外も視野に入れて、アウトリーチ活動を推進していきたく考えています。

最後に、今年は、第 2 次世界大戦が終結して 80 年になります。しかし、ウクライナやガザでは、戦争の悲惨さを知りながら、戦争を止めようとはしていません。戦争は、利己的でなく、利他的な行為の結果かもしれない。広辞苑を引けば、「自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと」と説明される「利他性」は、“自分の属する集団の成員に対しては利他的にふるまい、他集団とは関わり合わないこと”、さらに言えば、戦争が利他性を進化させたと論じる学者もいます。このような偏狭な利他性から普遍的な利他性に変えることが、この 80 年間の人類の課題であったはずですが、この課題を解決することはますます厳しくなるばかりですが、私たち大学人は、この課題に真摯に向き合って、解決していく努力をさらに続けていくことが必要でしょう。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

1 月 29 日 誰もが安心して通える大学へ、教育学野で車いす講習会

教育学野では、車いす利用学生への対応や教職免許取得に必要な介護体験指導を円滑に進めることを目的に、1 月 29 日に「車いす講習会」を開催した。講習会には、教育学野の教員を中心に約 20 人が参加した。講師は、同副学野長の新井英靖教授と、教育学部修学支援員の田原敬准教授で、いずれも特別支援コースの教員。車いすユーザーの加藤純奈さん（教育学部 1 年）と、加藤さんの友人で介助経験が豊富な落合仁栄さん（同）も講師役となり、気を付ける点や体験談を共有した。



1月30日 教育学部附属学校の児童たちが学長を表敬訪問

絵画やピアノなどさまざまな分野で活躍する教育学部附属小学校・附属特別支援学校小学部の児童9人が、1月30日、太田寛行学長を表敬訪問した。

児童たちは、全国大会の表彰状やトロフィーを見せたり、作った作品の説明をしたり、演奏を聞かせたりして、自分の頑張りを学長に伝えた。学長は時折拍手をしながら、「すごいね」「(絵を見て) カラフルで素敵だね」などと話した。



令和 7 年 2 月

2 月 3 日 日立建機株式会社と包括的な連携に関する協定を締結 ネーミングライツも予定

茨城大学と日立建機株式会社は、2 月 3 日、人材育成、研究開発などの相互協力を目的とした包括的な連携に関する協定を締結した。

建設機械製品の開発に必要な技術分野が機械工学から電気電子・情報通信・ソフトウェアにまたがる中、日立建機はデジタル技術を含む幅広い分野を総合的に扱うエンジニアの育成に注力している。また同社は、産学問わずパートナーを広く社外に求め、オープンイノベーションを推進している。

一方、茨城大学は、工学部・大学院理工学研究科において「地域産業に貢献する製造系高度 IT エンジニア」の育成を強化しており、地域の企業などと協力して、機械・電気電子・情報通信を横断したカリキュラムの構築や研究の実践を進めている。またビジネスとデータサイエンスにおける分野・文理を横断した学びや有給のコーオプ実習を特徴とする地域未来共創学環の新設、総合気候変動科学の創出を図る 4 つの研究センターを軸とした研究・産学官連携体制の強化など、ステークホルダーとの共創による教育・研究を推進している。

このように両者の人材育成の方向性は合致しており、茨城県に立地する大学・企業間のオープンイノベーションとして両者が連携・協力することにより、双方の人材育成や研究開発を加速し、社会価値および地域の発展につながるものと考えから、このたび本協定の締結に至った。

水戸キャンパスで行われた締結式で、日立建機株式会社の先崎正文執行役社長は、「ともに茨城県に位置するという私たちが緊密な連携協力を図ることで、私たちの人材育成や研究開発を加速することだけでなく、その成果を地域社会の発展や茨城県における社会価値向上への貢献として還元できるものと考えています」と述べた。

今後、本協定にもとづく施策として、日立建機提供の教育講座の開設やインターンの実施、「革新的ソリューション」をめざす共同研究センターの開設などを予定している。また、本協定の締結に合わせ、日立建機は、水戸・日立両キャンパス内施設のネーミングライツを取得予定。



太田学長（左）と日立建機の先崎執行役社長（右）

2月14日 茨城大学教育学部4附属学校園の統合シンポジウムを初開催

2月14日（金）、「茨城大学教育学部附属学校園統括シンポジウム #1『デジタル』」を、附属中学校体育館において開催した。

茨城大学教育学部の4つの附属学校園では、2024年度から「グリーン」「デジタル」「グローバル」「ダイバーシティ」の4つのテーマを掲げ、教育学部の教員らとともに横断的に実践研究を進めている。これらの研究成果をもとにしたデジタル教科書の出版も予定しているなど、大学の附属学校園としての特色を最大限活かした取組みを強化している。

本シンポジウムも大学・教育学部・附属学校園の連携による取組みとして企画したもの。今回は「デジタル」をテーマに、各学校園から代表教員が登壇し、実践を紹介。さらに応用理工学野の小澤佑介准教授、教育学野の川路智治助教も登壇し、テーマの専門的視点と現場実践の視点の両方を踏まえたディスカッションを展開した。



2月27日 令和6年度後学期成績優秀学生表彰式を開催

2月27日、令和6年度後学期成績優秀学生表彰式が開かれ、学部2年次と大学院2年次（修士課程／博士前期課程／専門職学位課程）の学生計68名が表彰されました。表彰式は水戸・日立・阿見それぞれの会場をオンラインでつなぐ形で実施した。



水戸キャンパス



日立キャンパス



阿見キャンパス

令和 6 年 3 月

3 月 3 日 令和 6 年度茨城大学学長学術表彰及び未来の科学者賞 表彰式・受賞記念講演会を開催

茨城大学は 3 月 3 日、令和 6 年度茨城大学学長学術表彰 表彰式・受賞記念講演会を開催した。今年度は石井 宏典 人文社会科学野教授、藤原 貞朗 同学野教授、鵜野 将年 応用理工学野准教授が受賞した。

この学術表彰は、先進的・独創的な研究を実施している研究者の特筆すべき成果をたたえるもので、学会賞や文部科学大臣表彰等を受賞するなど優秀な研究成果を残した研究者には、優秀賞が贈られ、受賞を記念した講演会では、石井教授と鵜野准教授が研究テーマをもとに講演を行った。

また、この日はあわせて、教育学部附属中学校 3 年の石上奏さんに、附属学校園の児童・生徒を対象とした「未来の科学者賞」が贈られた。石上さんは、全日本中学校技術・家庭科研究会主催「第 23 回全国中学生創造ものづくり教育フェア」プログラミングコンテストにおいて、「サポートアプリ〜栄一と目指せ健康〜」が最高位の文部科学大臣賞を受賞し、その成果をたたえられた。石上さんはこの日の表彰式には参加できなかったが、事前に学長から表彰状を手渡されており、その際の様子が動画で配信された。



石上さんの表彰の様子



3 月 5 日 令和 6 年度学生表彰式を開催

3 月 6 日に「令和 6 年度学生表彰式」が開かれ、個人 59 名、2 団体が表彰された。

各分野を代表し、太田倫汰郎さん（理工学研究科博士前期課程 1 年／学術・教育の分野）、山田康太さん（陸上競技部／教育学部 3 年／課外活動の分野）、CHIN TECK CHING さん（工学部 4 年／ボランティア活動等の分野）が表彰状を受け取った。

表彰を受けた学生を代表して太田倫汰郎さんは「このような形でこれまでの研究への取り組みとその成果をご評価いただけますことは大変名誉でありうれしく思います。もともとのづくりに携わる

技術者になりたいと思い、工学部に入学いたしましたが、4年次にバイオメカニクスの分野に出会い、強く興味を持ちました。現在はがん細胞に対しての研究に取り組んでいます。指導教員の長山和亮教授から丁寧なご指導を賜り、また、長山先生の研究に取り組む姿勢や心を間近に拝見し、学問に対する向き合い方について多くのことを学ばせていただいております。今後も探究心を忘れず、一つ一つのことに真摯に向き合いながら学問の発展に貢献できるよう努めてまいります」と謝辞を述べた。



太田倫汰郎さん



表彰式出席者

3月14日 コンプライアンス管理職特別研修を実施

茨城大学はコンプライアンス遵守のさらなる徹底を図るため、3月14日、大学執行部等の管理職を対象に、「コンプライアンス管理職特別研修」を行った。講師は六田・坂本法律事務所の坂本順子弁護士。

元小学校教諭の坂本弁護士は、「民間企業におけるガバナンス体制と公立学校における法律相談体制」と題し講演。特に上場企業における機関設計、リスク管理体制などについて説明した。あわせて、公立学校における法律相談の現状なども紹介した。



坂本弁護士

3月22日 みんなのイバダイ学シンポジウム 「イバダイの価値を問う」

茨城大学は3月22日（土）、「みんなの“イバダイ学”シンポジウム『イバダイの価値を問う』」を、茨城大学水戸キャンパス人文社会科学部講義棟10番教室他で開催した。2024年度は、茨城大学にとって創立75周年、源流である茨城師範学校の創設からは150周年となる節目の年。国内の国立大学で授業料の値上げの動きも議論を呼んでいる中、世界や日本における大学の価値を市民と一緒に語り、考える場を創出したいという思いから、6年ぶりに開催する同シンポジウムのテーマを「イバダイの価値を問う」と設定した。

シンポジウムは三部構成で、第一部は、科学史家の隠岐 さや香 氏（東京大学大学院教育学研究科教授）が「今、日本の大学が世界のためにできることー地域から発信する平和と自由のための教育・学問」と題して基調講演を行った。隠岐氏は、激動するグローバル社会において、「田舎」としての日本の特性への自覚を活かした「静かなイノベーション」の追究が、地方大学の価値になるという認識を示した。

第二部では、教育、研究、地域の価値という三つの切り口ごとの分科会に分かれて、年代・ジェンダーの多様な本学教員によるディスカッションを展開した。そして、第三部は、分科会の報告を踏まえ、隠岐氏や分科会のモデレーター、佐川泰弘理事・副学長らがパネルディスカッションを行い、シンポジウム全体を通じて見出すべき茨城大学の価値について議論を繰り広げた。

シンポジウムには学内外より100名を超える参加があった。



隠岐 さや香 氏



3月25日 令和6年度卒業式・学位記伝達式を挙行

3月25日（火）、茨城大学の令和6年度卒業式・学位記伝達式を挙行し、2,080人に学位記や修了証を授与した。

卒業式は初めて水戸市民会館グロービスホール（大ホール）にて開催された。



【学長答辞】

本日、卒業式・修了式を迎えた 2,080 名の皆さん、卒業・修了おめでとうございます。

皆さんがこれまで積み重ねてきた努力に、心から敬意を表します。また、皆さんの学業や研究活動を支えてこられたご家族や友人の方々にも、心からの感謝とお祝いを申し上げます。

皆さんの多くが大学生生活をスタートさせた 4 年前、世界は新型コロナウイルス感染症のパンデミックという未曾有の事態に直面していました。社会全体が困難を乗り越えるために助け合う一方で、戦争や対立のように、人類が未だ克服できない問題も浮き彫りになりました。

助け合いと戦争というジレンマを抱え続ける現代社会は、今後どのように変化していくのでしょうか？

その問いに向き合いながら、私がこの数年で読んだ著作からの気づきや考えたことを、皆さんに紹介します。

まず、社会生物学者のエドワード・ウィルソンの言葉、「われわれは、石器時代からの感情と、中世からの社会システムと、神のごときテクノロジーをもつ」について考えてみましょう。この言葉の意味を、教育者の近内悠太は、「私たちの『身体と心』『制度やシステム』『テクノロジー』がそれぞれ異なる時間軸で進化しており、それぞれのタイムスパンがあまりにも“チグハグ”である」と説明しました。

進化生物学の概念である「進化的適応環境 (Environment of Evolutionary Adaptation, EEA)」によれば、私たちの感情は少なく見積もっても 1 万年前までの狩猟採集時代に適応したものです。しかし、現代社会はテクノロジーが著しく進展していますが、ヒトの感情は狩猟採集時代と大きく変わらないままということです。この“チグハグ”こそが、現代社会の課題を生む要因の一つになっています。

たとえば、現代人の肥満や糖尿病が挙げられます。狩猟採集時代には、食べ物が入手できないときに備え、得られた食料を過剰に摂取し、脂肪として蓄えるように適応進化しました。しかし、現代になって、食料が

豊富な社会では、この進化的適応が逆に健康問題の一因となってしまっています。

もう一つ、国際政治学者のブライアン・クラースの著作にも、こうした“チグハグ”の例が示されています。

「その大統領は、まるで時計で計ったかのように定期的に、上半身裸で乗馬している姿や、柔道の稽古をしているところや、戦士のように力を誇示している写真を公表する。このようなシグナルが効果を発揮しうるのは、私たちの石器時代の脳が、リーダーシップの資質を身体的な大きさと結びつけて捉えている面が依然としてあるからだ。」

「その大統領」とは、本では実名ですが、皆さんは想像がつくでしょう。石器時代と変わらない脳が、現代においてもおかしな行動を引き起こしている例と言えます。

では、進化的適応環境で適応進化したヒトの特性は、すべて現代社会にとってマイナスなものなのでしょうか？

私は、そうではないと思います。なぜなら、私たちの脳は「助け合うこと」の価値も理解しているからです。それが、「利他性」、すなわち「自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと」です。だからこそ、国連は「誰一人取り残さない」という SDGs の理念を掲げることができたのです。

しかし、私たちは本能的にグループや集団を作るため、「利他性」が限定される傾向があり、「偏狭な利他性」が生じてしまいます。すなわち自分の属する集団には利他的にふるまうが、他の集団とは関わりを持たず、さらには対立するという特性です。この「偏狭な利他性」が、集団間の対立や争いの要因となっているのではないか、という指摘もあります。

それでも、私たちは、助け合いを意識し、集団を超えて学び合い、一緒に行動することで、この「偏狭な利他性」を乗り越え、「普遍的な利他性」へとシフトすることが可能です。皆さんは、茨城大学での学びを通じて、すでに「普遍的な利他性」へ向かう力を身につけています。本学のディプロマ・ポリシーの第一項目である「世界の俯瞰的理解」は、多様な文化や価値観を知り、他者との共感を深めるための第一歩です。

そして、皆さんの中には、iOP (Internship Off-campus Program) の活動に取り組んだ方もいると思います。iOP を通じて、国内外の地域の人々と交流し、語り合い、課題を共有し、その解決策を考え、助け合う経験をしたことでしょう。

それらすべてが、「偏狭な利他性」を乗り越える具体的な行動だったはずです。

これからの未来は、皆さん一人ひとりの選択によって形作られます。どうか、世界の変化を俯瞰し、多様な価値観を受け入れ、よりよい社会の実現に向けて力を発揮してください。

皆さんの挑戦が、未来を創ります。

以上で、茨城大学、令和 6 年度卒業式・修了式の告辞といたします。

本日は誠におめでとうございます。

令和 7 年 3 月 25 日
茨城大学長 太田寛行



3月25日～4月4日 茨城大学が水戸市の中心市街地へアウトリーチ！「まちのイバダイ」

3月25日～4月4日の11日間、茨城大学水戸市街地アウトリーチ週間「まちのイバダイ」と題し、水戸市民会館や商店街の施設などで、地域の方々と楽しむイベントを連続的に展開した。企画運営は教職員だけでなく、水戸市内の企業や団体と協働して行った。

これは卒業式・入学式をまちなかの水戸市民会館で実施することになったことを踏まえ、いずれの式典でも約2000人の学生が水戸市中心市街地を訪れることから、この間を「茨城大学と水戸のまちがクロスする11日間」と位置付け、連続的なワークショップを行ったもの。

開催イベントは計13。施設や店舗と協力した様々なワークショップや展示企画を実施したほか、街頭の公衆放送を利用したキャンペーンなど、まちなかで茨城大学の存在を身近に感じてもらえるような仕掛けも展開し、「今後も同様の機会があるならコラボレーションしたい」などの声も多く聞かれた。



フォーミュラ部による展示



江戸時代の料理「ごぼうもち」を再現する
ワークショップ



水戸市のまちなかの至る所に置かれた
「まちのイバダイ」チラシ